

東京まゆみ会会報

第34号 (令和4年8月)

3) 遠高同窓会報 第46号 令和4年6月1日(水)



特集 令和5年の創立100周年に向けて

安達高等学校創立100周年記念事業

記念式典開催日

「令和5年10月28日」に決定!

第3回実行委員会を令和3年12月10日(金)18時から安達高等学校第一会議室に於いて開催しました。

五輪会長、猪俣校長、松山PTA会長から挨拶のあと、各委員長より進捗状況報告と今後の活動計画等の発表がありました。



令和3年12月
実行委員会開催

総務委員会

記念事業のメモリアル基金と、記念誌発行のため計画的に募金活動をする。

校舎前庭の木が老齢化となり養生に堪えない状況のため、100周年記念事業として新たに植樹する計画をすすめる。

100周年記念事業メモリアル基金創設 基金額 1,500万円

創立100周年記念事業として、母校のより良い教育環境の整備と人事育成を目指し、メモリアル基金を創設することで募金をお願いしているところです。基金の使途については、学校・PTA・同窓会からなる記念事業専門委員会で検討を進めているところですが、在校生が自分の夢を実現できる一助となるよう、同窓生の皆様からも使途についてご意見をいただければ幸いです。

また、現時点で目標額に達しておりませんが、再度募金趣意書と振込用紙を会報と一緒に送らせていただきます。重ねてご芳志賜りますようどうぞよろしくお願いいたします。

記念式典委員会

会場の取押さえは済んでおり、式典の具体的な内容については、順次進めていく。

記念祝賀会委員会

会場の取押さえは済んでおり、祝賀会の出席者、アトラクションなどを検討していく。

記念事業委員会

式典後に、同窓生で日本看護協会の堀井ト子氏の講演をお聴きしている。

海上白鳥隊音楽隊の演奏会については、100周年記念事業の一環として検討している。

まゆみの精神



強靱であれ その木の如く

しなやかであれ その枝の如く

清楚であれ その花の如く

誠実であれ その実の如く

東京まゆみ会

目次

「三度目の正直」ならず	東京まゆみ会会長	高橋 智章	1
「母校からのプレゼント」	安達高等学校同窓会会長	五輪 美智子	2
「東京まゆみ会の皆様へ」	福島県立安達高等学校校長	伊藤 勝宏	3
「母校を愛する一人として」	神野 宗介	(昭和35年卒)	4
「喜寿過ぎて見えてきた生きがいの頂」	七森 栄子	(昭和38年卒)	6
「達高を卒業しての歩み」	渡辺 弘次	(昭和45年卒)	8
「私の3・11」	野地 章	(昭和49年卒)	10
「すべては傷病者のために」	本田 清五郎	(昭和44年卒)	12
会員近況報告	東京まゆみ会	会員	14
令和3年度年会費納入者ご氏名	東京まゆみ会	事務局	24
安達高校創立100周年記念事業の進捗状況について	東京まゆみ会	事務局	25
東京まゆみ会会則	東京まゆみ会	事務局	26
現在の役員体制	東京まゆみ会	事務局	27
東京まゆみ会からのお願い	東京まゆみ会	事務局	27
編集後記	東京まゆみ会	会報編集委員会	27

【表紙の写真】

「令和5年の創立100周年に向けて」
 安達高校同窓会『達高同窓会報第46号』より転載



「三度目の正直」ならず

東京まゆみ会会長

高橋 智章（昭41年卒）

会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

すでに会員の多くの方におかれましては3回目のワクチン接種を終えられていることと思われまします。4回目の接種についても開始されているようですがコロナウイルスの影響がこれ程までになるとは全く予想が及びませんでした。このような状況の下での開催は厳しいとのことから止む無く東京まゆみ会も昨年・一昨年と2年続けて総会・懇親会の開催を見送らせていただきました。「三度目の正直」、今年こそは開催をと願っております。7月からの感染の急拡大に伴い、誠に残念ですが開催を見送らせていただくことといたしました。

コロナ蔓延により、世の中これまでとは考え方、行動様式が大きく変わってきました。理解できないこともありませんがコロナ以前には戻れないことも確かにあります。コロナに係わる医薬品の国内開発に関する情報も聞きますが、世界中の医療関係者・科学者・薬品会社など、コロナの感染に関するすべての人々がコロナ蔓延防止・治療に関して日夜英知を結集し、開発に向かってこの難局を是が非でも乗り切っていたきたいと願っている見方が多かったように思います。これほどまでに新型コロナウイルスの影響が広がると誰が予想できたでしょうか。

コロナウイルスの感染拡大が危惧されたとき、最初に私の頭

に浮かんだのは100年前に流行したスペイン風邪でした。

ある人類学者は1968年第1作公開のSF映画「猿の惑星」だったと述べています。「感染症の新薬開発中に、実験用のチンパンジーがあるとき人間の言葉をしゃべるようになる。人間の世界ではウイルス感染が広がり絶滅の危機。生き残った僅かの人間はしゃべれなくなり、この感染症に抵抗力を持っていた類人猿に支配されるようになった。」このような内容の映画だったと思います。

コロナ収束はまだわかりませんが、これから考えられる懸念として、コロナ後に各国が猛烈な経済復興対策を取り、それがこれまで以上に地球の崩壊を招くことかもしれません。近年のウイルス性の感染症は、自然破壊によって野生動物との接触を加速したことが原因であることが分かっています。これから先に自然資源の開発が続けば、深海や氷河の下に眠っている人類未知の微生物やウイルスを引き出してしまいかもかもしれません。開発の手を抑えたとしても、地球の温暖化は生物の動きを変えて、更に新たな脅威をもたらす可能性があることは確かです。

今私たちに必要なのは、人類が生存している地球と国の動きと、私たち自身の身近な暮らしの双方で、人間にとって大切なことは何かということ。「人類と自然の共生」を真剣に考え、具体的な行動をおこすことが求められている大事な時かもしれません。

10月15日（土曜日）、3度目の正直、今年こそは会員の皆様と良いご縁を温めることができますように役員一同心から念じておりましたが残念でなりません。来年2023年の母校創立100周年は、多くの皆様とご一緒に迎えられることを強く願っております。



「母校からのプレゼント」

福島県立安達高等学校同窓会会長

五輪 美智子

今まで数えきれない程のプレゼントをいただいて生きてきた私は、幸せ者です。中でも、母校「安達」からのプレゼントは、私の人生の背骨になったと言っても過言ではありません。

生まれて間もなく生家を離れ、引越しと転校を繰り返した私にとって、入学から卒業までの日々を過ごすことが出来た安達高校は「もう一つの家」そのものでした。祖母と母の母校でもある「安達」は私に確たる居場所の持つ「安心」をプレゼントしてくれました。

明治生まれの祖母は大胆な夢想家で、母は慎重な堅実派。私の人生の岐路には必ず2人からの「迷うな」と「待て」の助言！今は亡き2人ですが、困難極まりない状況に陥るや2つの助言が蘇り、次の一步を踏み出す背中をそっと押してくれます。その優しさと安堵は、同窓会の会議や行事で母校を訪ねる度に感じるものと同じです。何一つ確実なものなどない世の中で、決して消えることのない記憶や思い出が、いかに心を慰め、時に鼓舞してくれるものかを経験してきた私にとって、母校「安達」は、懐かしい祖母と母の存在そのものです。

さらに母校は私に「古典との出会い」をプレゼントしてくれました。私にとって最初の古典は祖母のお土産の「鉢かづき姫」。大きな鉢を被された独りぼつちの異形の姫君に、これでもかと押し寄せる不幸と、霊験あらたかな長谷観音の救い。全てを我

が事のように思い込み、はては自分の困り事まで、見たことも行ったこともない奈良の観音様をお願いする私を、母はいたく心配したとか。寝床にまで持ち込み、ぼろぼろになるまで本を読んだ経験は私を乱読の徒に変え、そこに母校での「古典との出会い」が重なりました。授業の面白さは勿論のこと、辞書があれば自分だけの伊勢物語や徒然草を味わうことのできる喜びは感動そのものでした。毎日毎日、辞書を片手に挑戦した口語訳は、先生の机上に！お忙しい中、添削して下さった先生方に、今も頭が下がります。そしてとうとう18才の光源氏に遭遇！それが大学で学びたいものになり、卒論になり、私に国語教師への道を選択させたことを思うと、青春の出会い「ゆめゆめ軽んずべからず」です。高校生で創立50周年を経験し、母校の教壇に立つて創立60周年と80周年を達高生と一緒に祝い、今また来年に迫った100周年のお手伝いをさせていただけるのも、母校からのプレゼントに違いありません。

ただ今、令和5年10月28日の式典開催をめざし、「安達高校100周年メモリアル基金」創設と「100周年記念誌」発刊に向け、5つの委員会が熱く話し合いを重ねています。今年卒業生が描いた原画でファイルを作成し、卒業記念品の1つにすることから始め、3年に1度の公開大文化祭に同窓会もブースを作って参加するなどの予定を立てています。

今年の総会も開催を断念せざるを得ませんでしたが、入学式で3年ぶりに校歌が披露され、体育館中が感動に包まれたのは、この上ない喜びでした。来る秋、東京まゆみ会で皆様に、100周年記念事業の進捗状況をご報告できるのを楽しみにして筆を擱きます。



「東京まゆみ会の皆様へ」

福島県立安達高等学校校長

伊藤 勝宏

令和4年度の人事異動により、只見高校より赴任いたしました伊藤勝宏と申します。東京まゆみ会の会報第34号の発行、誠にありがとうございます。一言ごあいさつ申し上げます。

先日私は、同窓会報の安達高校着任のあいさつの中で、只見高校の21世紀枠での甲子園出場により、選手ばかりでなく一般の生徒たちも成長していったことで、学校が活性化し、生徒が自分が学ぶ高校に誇りが持てるようになったことを書きました。安達高校の校長として、本校でも生徒たちに、安達高校に学んでいることを誇らしく思えるようになってほしいと考えています。そのために、次の2点について実施していきます。

一つ目は、部活動でも、ESDの研究発表でも、自分の望む進路実現でも良いので、生徒たちには「自信が持てる経験」を日々しっかりと積み重ねさせるといことです。自ら考え、目標を立て、そのための準備・計画を行い、それに向けた努力を積み重ねる。結果は必ずしも伴うとは限りませんが、努力は裏切りません。「頑張れた」という自信が持てる経験を数多く積むことで、自らを成長させる原動力にしてほしいと願っています。二つ目は、安達高校が100年間培ってきた歴史や伝統について、改めて考える機会を持たせるといことです。

私は、4月16日の本校創立記念日に向けて、始業式の際に、生徒たちに次のような話をしました。大正時代、この二本松の

地に中学校を造ろうとした学校創立時の地元の人々の熱い思いについてです。また、5月11日の生徒総会の折には、生徒たちに向けてこんな話もしました。20年前の平成14年度には、安達高校は学年8クラスで生徒数が955名でしたが、本年度は、学年4クラスでも定員割れになり、生徒数は443名と半数以下に減ってしまっています。わずか20年で生徒数は半数を割り込み、先生の数も半減しました。これにより、部活動に加入する部員数も減少し、存続も難しい部も出てきているという話です。

安達高校が、将来もサステイナブル（持続可能）な学校として継続していくためには、地域の子供たちが入学したいと思える魅力ある学校であることが極めて重要です。そのためには、現在在籍している生徒たちが生き生きと学習し、部活動に励み、進路が実現できる学校でなければなりません。実際、生徒たちは、日々明るく活発に活動しており、部活動でも多くの部でインターハイの県大会出場を果たしました。また、進路においても、卒業生は希望する進路先に進むことができています。ユネスコスクールのESD教育や地域と連携した探究活動などもしっかりと取り入れながら、安達高校をより楽しく魅力ある学校にすべく努力して参ります。

安達高校は来年度、令和5年度に創立100周年という大きな節目の年を迎えます。今後も安達高校が同窓生に愛され、地域の皆様に信頼される学校として存続できるよう、安達高校は、次の100年に向けた新たな学校へと進化して参ります。

同窓生の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



「母校を愛する一人として」

神野 宗介（昭35年卒）

一、はじめに・・・達高健児の意気を知れ！

私は昭和35年3月に卒業した者で本年81歳となりました。学生時代は柔道部に所属し、3時の学校終了時から2時間から3時間、学校の道場で柔道の練習に一日も欠かさず参加修練し、帰宅し夕食後、町の紺野道場へ7時から9時まで休むことなく柔道一直線の学生時代を過ごし、負けずぎらいの達高健児の3年間でした！

勉強についても母親の学校のテストの全てが100点満点、それ以外とったことがないとの事実を知らされ、「やれば出来るんだぞ！」との叱咤激励に励まされ、高校2年の後半から予習復習を徹底し、誰よりも努力、試験間近には部活を10日間休み、ほとんど100点、平均点93点を勝ち取り、おふくろに感謝し、大いに喜んでもらったのを覚えております。

3年の卒業式には以上総代で卒業賞状を頂いたのを生涯忘れることはありません！正に文武両道、3年生で昇段3段となり、現在は6段です。

二、社会人として・・・国家を支える仕事に取組み60年！

高校を卒業したら柔道を生かして警察官になろうと考え、母方のおじさんが上野警察署長であったので、そのこねを訪ねて就職の依頼を、母親を通じてやっておりました。

ある時、二本松でそのおじさんとお逢いする機会が出来たので、私も署長目指して警察官になりたいと話したら、これからは大学卒、特に警察学校の人間が多くなるからどこか大学出てから来いと云われ：勤労学徒の道を選びました。

職業選択をしている内に、将来はトップ経営者社長を目指し、資金を貯めて政治家になろうと考え、政治家の秘書官を探し、ほぼ秘書役として東京の事務所での決定が目の前になった時、その秘書長の方と呼ばれ、「神野君、政治家になるには最低2億円から3億円かかるぞ、あるのか!!」と云われ、結局断念、現在の道、職業会計人として60年の人生を過ごし現在を迎えております。

然し、我々税理士職業会計人は、国家を支える集団であり、税金は政治の鏡、税制は国家財政の背骨を正す役を託されており、その先頭に立つて国家を支え、時には国家をノックし、独立公正な立場の使命条項にふさわしい仕事に、取り組みをしておる毎日であります。

三、結びに、現在の日本の現状と未来への不安!!

今、80歳にして思うこと

さて、日本の現状と将来について立場上毎日のように問われている今日この頃です。税金は正に政治の鏡であり、税制は国家財政の背骨を担っていると書きましたように、令和4年の今日、正にそのことを抜きにして語れない時代となりました。

そこで私はやむに已まれず「出版物」を書き、国家をノックしようと考えました。

それが、新型コロナ禍本番大不況前夜の今！

国家国民の責任者である為政者よ

使命感と燃える情熱をもって

国家と国民の生活を必死で守り切れ！・・・であります。

ここでの要約を申し上げれば次の通りです。

政治家は国民より国家運営を託されているのですから、国家ビジョンを示す責任があるはずで

す。ビジョン無き組織は必ず崩壊するとの先哲の教え通り、国家を守るとのビジョン無き国家も崩壊してしまいます。

更には、100年に一度の大災害、新型コロナの感染が世界中に拡大を続け、先行きが見えない世界観、国家観であります。

今後は、経済コロナ不況がウイズコロナ、アフターコロナの中でやってきます。

日本の現状と未来に対し、自民党はじめ日本政府に、国民を守り、安心と平和を守り切るとのビジョンがあるのでしようか
!!

校歌の一字に達高健児の意気を知れ！とあります。今がその時であり、我が国民が立ち上がる時だと断言します！



「喜寿過ぎて見えてきた生きがいの頂」

七森 栄子 (旧姓 神野 栄子) (昭38年卒)

●故郷の漬物を広めたい

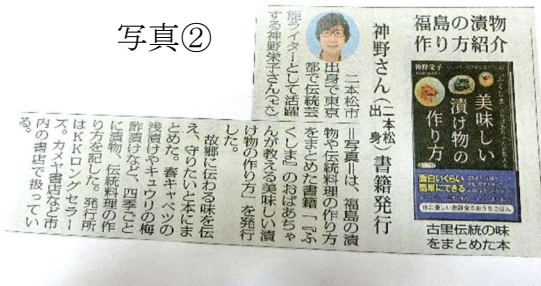
コロナ禍で私達の日常生活が一変した。働き方も大きく変わり、在宅勤務が定着して「おうちご飯」がトレンドになり、料理作りにチャレンジする男性も増えた。ならば野菜も作ってみようと、家庭菜園もブームだ。

昨年はコロナ禍の中、「3・11東日本大震災10年」を迎えた。知り合いの出版社の社長が「おうちご飯にぴったり、福島の漬物を紹介して」ということで、『ふくしまのおばあちゃんが教える美味しい漬け物の作り方』(KKロングセラーズ刊) Ⅱ 写真① Ⅱ を出版。「福島民報」でも紹介された。 Ⅱ 写真② Ⅱ



写真①

福島民報 2021年(令和3年)4月5日(月曜日)



写真②

実家は今でも米作りの専業農家で、18歳まで過ごした二本松の在郷では、四季折々の山の幸を祖母や母が丁寧調理していた。味噌や納豆も自家製だった懐かしい時代。

春はフキノトウのほろ苦さが忘れられないフキ味噌、夏はジュウネン(エゴマ)で作った冷や汁、キュウリを浮かべていかにも涼し気だった。秋はシソの実漬け、正月の定番は「イカニンジン」、提灯祭りに食べた赤飯とザクザクという汁物、忘れてたい郷土の味だ。

母が麴を寝かせてつくっていた三五八漬けは麴と塩で床を作る発酵食品で、麴の旨味が体にやさしくしみ渡り、ぜひ広めたいと思う。

私は料理研究家やフードコンサルタントでもないが、「伝統漬物案内人」になり、福島の漬け物や郷土料理など83種を紹介した。一品一品作って味を確かめ、レシピも書いた。

半世紀以上、雑誌の編集や文筆業を生業にしてきた。現在のライフワークは東京新聞の伝統芸能面で落語や講談、浪曲などを取材する「演芸ライター」である。まさか、漬け物の本を書くとは思わなかった。

これもコロナに背中を押されて新しいジャンルが広がった。在宅勤務を活用する働き盛りのイクメンパパの代役?で喜寿ライターは夜の落語会、休日の取材で走り回ってきた。

伝統芸能の世界は人と人とのつながりがカギになる。長年の取材活動を通して知り合った先生や芸人は私の財産になった。デスクに「あの人がいいね」と言われた時に、その人の情報が引き出せるようにいっぱいになったタンスの整理を始めたところである。

●映画「二つ目物語」全国公開へ

コロナウイルスが感染拡大し、「緊急事態宣言」が発令された2020年4月ごろから洋楽・邦楽にかかわらず、実演家たちはほとんど公演がなくなった。落語家や講師など芸人たちも「仕事がない」という未曾有のどん底生活を経験した。戦時中でさえ開場していた都内の寄席が閉場するという非常事態を招いたのが今回のコロナ禍であった。

ワクチン接種が浸透し、今年になってから「3年ぶりに開催」などと枕言葉をつけてイベントや公演が再開されている。コロナ以前にはなかなか戻らないが、マスクを付けての演芸場は少しずつ客足が戻りつつある。

落語と講談の世界では厳しい階級制度がある。落語会を見ると見習い、前座、二つ目、真打と昇進していく。前座を4年ほどつとめて二つ目を約10年。一人前の真打ちになるまでには14〜15年かかる。二つ目時代の努力が真打昇進後の落語家生活を支えるといっても過言ではない。独自の落語会を開いたり、寄席で注目を集めるように芸を磨いていく。

東京には落語協会、落語芸術協会、五代目円楽一門会、落語立川流の4団体があり、約6百人の落語家達が所属している。最大会派の落語協会に所属する林家しん平は映画監督としても知られ、10年ぶりにメガホンを取り、真打を目指し、日夜励んでいる二つ目にスポットを当てたハートフル落語映画「二つ目物語」を制作した。監督から脚本まで手掛けた渾身の落語映画を作った。今春から全国各地で劇場公開され、6月には東京・池袋シネマ・ロサで上映された。

成長していく二つ目を主人公に短編3本のオムニバス。上席「貧乏昇進」、中席「幽霊指南」、下席「モテ男惚れ女」という

構成で二つ目たちの人間模様を描いた。

スタッフから役者まで落語家と色物(漫才など)総勢50人で作り上げた。その一人、しん平の弟子の林家あんこは、助監督兼役者で奔走した数少ない若手の女性落語家だ。

「助監督の仕事は出演者が気持ちよくカメラの前に立てるよう準備するのが大きな仕事。前座修行の延長で苦がなかったです。師匠である監督に、映画に出演したいという夢を叶えていただいた」と話す。③写真③ 林家あんこ(④、筆者) 映画出演をきっかけに、貪欲に落語以外に果敢にチャレンジしたいというあんこ。私はひたむきに芸を磨く若手芸人を応援したい。母親のような喜寿ライター役どころが定まってきた。喜寿を過ぎてもまだまだまだ社会貢献できることがあることを悟った。ようやく見えてきた“生きがいの頂”。いつまでも必要とされる人でいられるよう、頂を目指して登りつめようと思っ

(文中敬称略)



写真③



達高を卒業しての歩み

渡辺 弘次（昭和45年卒）

昭和42年（1967年）に入学し、旧校舎で2年間過ごしました。3年の時は新校舎でした。卒業は昭和45年（1970年）卒です。（5組）

個人的には新旧両方の校舎での学園生活ができて感謝しています。高校の受験の日は郡山市立日和田中学校の先生がスバルのカブト虫で送り迎えしてくれ、それから車が好きになりました。旧校舎の渡り廊下や、武道館の床が軋んで友と卓球をしたことが走馬灯のように思い出されます。希望の動機の一つは母親の従兄が、昭和25年達高卒（1950年）で福島大学経済学部を卒業して太平洋セメント（旧小野田セメント）に入社していました。

なぜ郡山市日和田町高倉の人が達高に入学したか？この年は、同じ中学から3人の入学でした。進学校より男女共学でのんびりと高校生時代を過ごしたいと、兄の姿を見て思いました（進学校の安積高校）。電車も下りですので座る事ができ本などを読むことができました。しかし通学時間は、ドアツウドアで2時間くらいかかりました。駅から歩く二本松の切通しの坂が、冬寒かったこと良く覚えています。この3年間の通学時間が私の体を鍛えてくれ、今があると思っています。

学生生活は、昼休みの時間は友人と卓球をして、部活は化学部（アニリンとかの染色が面白かったです）、文芸部（歴史物が好きでした）、どちらも顧問の先生は綺麗な女性の方でした（笑）。

1年の時の担任は菅野祐一先生（理科）でした。2年から田村孝蔵先生で英語の教ええ方が英字新聞からの切り抜きを参考に楽しく教えて頂きました。お陰で今でも英語は好きでたまに英語の雑誌を読んでいます。

のんびりしすぎたのか大学に入学するまで2年かかりました。しかしその2年間も無駄ではありませんでした。父の従兄が東京の板橋区でやっていた税理事務所で午前中働き午後予備校に通いました。個人的には大学入学前に、社会勉強ができそれ以後の人生にプラスになりました。

大学受験では、国立一ツ橋大学の1次試験は合格しましたが、2次試験で玉砕しました。有名私立も数校受験しましたが、結果的には私立の獨協大学（天野貞祐が創立に関わった）大学は学問を通じて人間形成の場」に共感しました）に入学しました。

大学では、経済学部で経済（主に経理関係）を学びました。ゼミの渡辺公平先生（日本製鉄㈱に勤務後GHQ経済科学局勤務）には公私ともにお世話になりました。製造業に興味を持ち三現主義（現場で現物を現物的に見ることを教わりました）。

従って、就職に選んだ会社はさいたま市（旧大宮市）に本社のあるマレリ㈱（旧関東精器㈱）↓カンセイ㈱↓カルソニックカンセイ㈱（自動車部品製造会社）でした。今現在マレリ㈱はADR（裁判外紛争解決手段）を申請して大変なことになっています。

入社して勤務は経理部で、経理全般と原価計算を担当しました。会社を選んだ理由としては、電車のラッシュアワーに合わず通勤することが出来るからです。会社に入社して初めて購入した車は先輩から譲っていたいただいたスバルレオーネでした。遠乗りしたときラジエターの水漏れをしたこと、パワステで無かったのでハンドルが重かったことです。しかし、マニュアルの醍醐

味を味わいました。予想に反して、退職前6年間の勤務は合併のため、東京都中野区の方南町まで約2時間(ドアツウドア)での通勤になりました。金曜日は自分へのご褒美で、新快速に座り缶ビールを飲んで帰るのが楽しみになりました。

56歳で早期退職をして、2年半太陽光発電のシリコンを作っている会社で化学プラントの装置産業(本社・台東区谷中)の経理担当として奮闘しました。下町の情緒を存分に味わいました。銭湯に入ったのが良い思い出でした。入社して1か月で中国北京にある子会社に出張して中国の国土の広さに驚きました。ちょうど北京オリンピックの時でした。人口が日本の13倍ですから、色々な面で日本にとって脅威です。今それが現実になって来ています。しっかりと日本国をまとめて強靱化しないと中国に飲み込まれてしまいます。

太陽光の会社は、結果的に台湾の会社に飲み込まれてしまいました。中国語ができない私は、女性の上司に解雇されました。

これからは、複数話せないためですね。

その後、地元の社会福祉協議会で総務担当及び資金相談員をして6年間過ごし、最後の1年間は、生活困窮者の相談員として活躍しました。日本も高齢化し孤独の方が増えてきて今後どのように生き生きとした生活の質を保ってゆくかが、課題になってきます。

6年間で仕事を変わらねばならず、社協の運営する生活介護の施設で4年間介護の仕事を学びながら担当しました。ここでも利用者の親の高齢化問題が顕在化してきています。

年下の上司でしたが、教え方が上手で楽しく仕事が出来ました。そんな仕事も年齢が69歳とのことで退職をせねばならなくなりました。

これで私の定職は終わりになりました。現在は地元のシルバ―人材センターに登録して自分の経験が生かせる適性にあった仕事をする予定でした。そして今地域で開催している認知症カフェの傾聴ボランティアをしています。

しかし新聞の折込みチラシの求人広告を見ていたら、近くの会社が午前中のパートさんを募集しているのを目ざとく見つけて、手書きの履歴書を送りました。面接をして頂き「履歴書の字が綺麗ですね」と言われ、少しは脈があるかと思いました。

思った通り思いが通じ採用になりました。昨年9月より勤務して現在に至っています。仕事の内容は板金用の鋏、掴み等を原材料から製作している会社です。その一部の作業では有りますが奥が深いです。昔でいえば鍛冶屋職人見習に成ったイメージです。子供の頃か町には鍛冶屋が有り鉄を叩いて鋳物を作っていた事を思い出します。これが最後の仕事かと考えて、先輩に教えて頂きながら鍛冶屋職人を目指し精進の日々です。

最後の自分のご褒美に、クロスバイク(自転車)を購入しました。近隣探索から始めて日本一周をすることです。できれば車に積んで瀬戸内海のしまなみ海道(サイクリングの聖地)へ行き走行する事が現在の夢です。しかし、自転車を購入して1週間くらいで右側の腰の神経が痛くなりました。整形外科で見ていただいたところ、少し背骨が湾曲し間隔が狭くなっているとのことです。治療に専念した結果、痛みが無くなって自由に行動できるようになりました。しかし右側に少し違和感が残りました。年相応に身体も弱っていることを認識した次第です。

皆様もお身体には気を付けて100歳を目指して好きな趣味を通じて地域に貢献してください。併せて終活も忘れずに。(笑)



「私の3・11」

野地章（昭49年卒）

32回目の結婚記念日を都内のマンションで妻と祝う予定のこの日午後2時46分、三陸沖を震源とする国内観測史上最大規模の地震が発生し、この地震により岩手、宮城、福島を中心とした太平洋沿岸部を巨大な津波が襲うとともに、東京電力福島第1原子力発電所においては、全電源が喪失、冷却機能が失われたことから水素爆発が発生し、大量の放射性物質が放出されるという深刻な原子力災害となりました。

この東日本大震災では、発生から3ヶ月を超えた6月20日時点で、死者約1万5千人、行方不明者約7千5百人、負傷者約5千4百人、約12万5千人が避難生活を送っていました。

また、この大震災では、数多くの警察官が職務執行中に被災し、命を落としました。福島県警察でも4名が殉職、1名が未だに行方不明となっています。殉職者の中には、私が三春警察署（現・田村警察署）の署長当時、刑事として勤務していたM君が含まれておりました。当時M君は双葉警察署に勤務しており、地震発生直後、パトカーで住民に避難を呼びかけていた最中、津波に飲み込まれて殉職したとのことでした。

発災当時、私は、福島県警察から警察庁に外向（3回目）し、生活安全企画課犯罪抑止対策室の理事官をしておりました。

私は直ちに課員を指揮して、被災3県の治安状況の把握と犯罪抑止対策に取り組むとともに、行方不明者の把握や安否確認、

各都道府県警察から派遣された女性警察官の部隊による避難所や仮設住宅を訪問しての相談対応等の業務に当たりました。

また、被災3県に対し、全国から多くの警察職員が派遣され（1日当たり最大約4千8百人）、自衛隊、消防等と連携を図りながら被災者の救出救助、行方不明者の捜索、被災地における安全・安心を確保するための諸活動が行われました。当然、被災3県から出向中の職員に対し帰任命令が出されましたが、福島県警察の松本本部長（後の警察庁長官）から、「君は、被災3県と警察庁のつなぎ役として警察庁に残り、被災地対策を続けよ。」との指示を受け、警察庁に留まることとなりました。

発災後、当時の菅内閣は、内閣府に防災担当大臣や各府省の事務次官等からなる「各府省連絡会議」を設置し、当初は週2回開催され、警察庁から安藤長官（当時）が出席し、警察の活動状況等の報告がなされました。この安藤長官は、私が警察庁人事課に外向（2回目）した際にお仕えした方であり、直接電話をいただき、被災地の治安状況や避難所等における防犯対策等について資料作成を指示され、毎週のように、多いときは1日5回も長官室に入って報告資料の取りまとめ等を行いました。ここで役に立ったのが、昭和61年から2年間、東北管区警察局（仙台市）に出向していた際に培った人間関係で、宮城・岩手の生活安全部長と直接電話で情報交換ができ、タイムリーかつスピーディーに被災地の情報を収集することができました。

また、発災当初、被災3県においては、住民が避難し、無人となった民家や店舗等を狙った窃盗事件が多発し、特に原発事故で全住民が避難した福島県浜通りでは、コンビニエンス・ストアに設置されていたATMが軒並み荒らされ、多額の現金が窃取されるという事件も多発し、国会で被災地の犯罪抑止対策

が取り上げられ、質問対応等に従事する日々を過ごしました。

そうこうしているうちに1年が過ぎ、出向期間（2年）満了が近づいた24年3月、福島県警察及び警察庁双方から「出向期間を延長し、引き続き被災地対策に従事するように」との指示があり、福島県警察に帰任できないまま警察庁での勤務を続けていたところ、上司から警察庁への転籍（永久出向）を要請され、25年8月に警察庁に転籍することになりました。

その後、27年3月（定年退職1年前）に犯罪抑止対策室長となり、ストーカー規制法改正等を担当する一方、依然として原発事故での住民避難が続いておりましたので、全国警察からの応援を受け、避難指示区域における犯罪抑止対策や復興庁での対策会議、国会での質問対応等の業務に従事しておりました。

28年1月、妻と一緒に退職予定者説明会に出席し、いよいよ退職を迎えようとしていたところ、ここでもまた、警察庁から「法改正や被災地対策もあり、定年を1年延長して勤務してほしい。」との要請を受け、犯罪抑止対策室長として1年間勤務延長し、29年3月、警察庁長官から直々に退職辞令と警察功績章（特に顕著な功労があると認められる者に対する表彰）を授与して頂き、43年に及ぶ警察官人生を終えました。

退職後は、以前警察庁でお仕えした方のお誘いで、「警察職員生活協同組合」（千代田区）に再就職しました。この組合は、現職警察官約30万人、退職警察官約10万人が組合員となつている職域生協で、生命共済や火災・災害共済、財形年金共済事業等を行っており、現在、参与兼事務局長をしております。また、在職中に死亡した警察職員及び警察活動に協力して亡くなられた方のご遺族に対する援助金支給事業等を行っている「一般財団法人ひまわり基金」の事務局長も務めております。

私は昭和49年に安達高校を卒業し、18歳で福島県巡査となりましたが、警察という組織は、学歴等にかかわらず、自身の努力と勉強により上位階級に昇任することが可能で、私の場合、県警で一番若い49歳で警察署長にさせていただきましたし、また、福島県警察にとどまらず、東北管区警察局及び警察庁に合計4回出向させていただき、平成28年には警視長（警視総監、警視監に次ぐ階級）にまで昇進させていただきました。

退職後も、警察職域における福利厚生の一翼を担う業務に就くことができ、長年お世話になった警察組織や全国の警察職員とそのご家族のお役に立てることを大変光栄に感じています。

このように私は今、「ふるさと福島」を離れ東京で生活しておりますが、振り返ってみますと「3・11」が私の人生のターニングポイントだったなと強く感じている次第です。

結びに、今回、寄稿の機会を頂き有り難うございました。



「すべては傷病者のために」

本田 清五郎（昭44年卒）

私の中学・高校時代は、両親の苦勞を見ているだけに家の農作業を手伝うことが多く、運動の部活をしたくても難しいものがありました。

早く自立して両親の重荷を軽くできればと安達高校を卒業後消防職に就職、ここから始まった40年の消防人生は初期の10年が消防業務、以後30年のほとんどはプレホスピタルケア（病院前救急医療）と呼ばれる救急業務に従事していました。

この長年の救急業務は「すべては傷病者のために」が口癖となるほど身体に滲み付き、専門学校救急救命士課程教員を経て第3の職場で働く今も合言葉のようになっていきます。

思い出しますと、上京した当時は、右も左も分からず仕事を覚えることで精一杯でした。当時の私は青春映画にあるような学業とスポーツを両立した学生が躍動する大学昼間部のキャンパスに憧れて夜学に通いつつ勤務の非番、週休日には陸上、登山、スキーと高校ではできなかったこれらに夢中になりました。そして、仕事の傍らに勉強、スポーツに専念した若い時代を経て、早くも50年余という半世紀が過ぎてしまいました。

現在私は、帝京大学医療技術学部スポーツ医療学科・救急救命士コースの非常勤講師として5年前から勤務しています。前段で記したキャンパスライフは、ようやく職員として叶うことになりました。

帝京大学は、昭和41年（1966）に設立され建学精神のほかに「自分流」という教育理念および「実学・国際性・開放性」を教育指針に掲げ全国に板橋を含めて5箇所のカンパスと10学部を擁する総合大学です。学生数は2万1千名を超え、現在までに15万人以上の学生が卒業しています。

私の在籍する板橋キャンパスは、附属病院が隣接し、医学、薬学、医療技術の3学部と看護学科などの5学科があり、学生数は3千4百余名です。

スポーツ医療技術学科・救急救命士コースは、医師3名と教授、准教授など非常勤講師7名を含め20名が在籍しています。当コースは15年前に開設され、すでに6百名以上の学生が卒業しています。

当コースは、救急現場や災害現場で活躍する「救急医療のスペシャリスト」である救急救命士を育成しています。救急救命士は、救急隊員ではできない高度な気道確保や心拍回復のための静脈路確保（点滴）と薬剤投与といった救急救命処置を医師の指示のもとに行うことが可能な国家資格です。

この制度は、救急需要が増加していく中で専門的な部分が求められるようになり、1992年に救急救命士の現場活動が始まりました。

高齢化社会の進行や気候変動などによる災害の多発など、救急救命士に求められる役割とニーズは増えています。

救急救命士の養成には、実際の救急現場に近い形でのシミュレーションによる隊活動の経験は不可欠です。シミュレーション授業は、各学年全日（4限）が毎週1〜2回あります。学生は校舎や階段を使用して各種の疾病に対する救護処置や搬送要領、グラウンドでは交通事故や一般事故などを想定した傷病者

の救護救出要領などを体験習得します。

私たち非常勤講師は、消防職員の救急救命士として長く救急車に乗務し、標題の基に数多く臨床救急事例を体験していますので、これらの授業に知識技術の指導やアドバイスを「すべては傷病者のために」即戦力となり得る救急救命士の育成を図っています。

救急救命士の多くは消防署の救急隊員として働いていますので、特に4年生は希望する就職先自治体の公務員採用試験と年度末の3月に行われる救急救命士国家試験に備えなければなりません。通常の授業もあるため猛勉強が重複します。現在1く4年生256名は先輩の後に続けとコロナ禍の中で将来の救急救命士を夢見て一生懸命に学んでいます。

私の健康の栄養剤は、救急救命士を夢見る学生たちとのコミュニケーションです。自分流を磨き、勉学に励む学生の姿とキャンパスに憧れていた若き苦学の自分が重なる充実感、職務の起爆剤となり老化防止に役立っています。

人生100年時代が現実になりつつある今、どのように生きるかが課題とされています。年齢、性別、役職などに関係なく前向きに新しいことに挑戦することが鍵のようです。もちろん、身体を害するようなことがあってはなりません。ここでいう救急車のお世話にならないように健康管理を第一として意欲をもつて歩んでいきたいものです。

安達高校を卒業した気概とこれまで歩んできた道のりは、私の誇りであり大きな財産です。この矜持を糧に、自分で限界を設けず夢を持ち続けられれば人生に定年はないと思います。

今後もプレホスピタルケアに何らかの形で関わり続けていけたら幸せです。

東京まゆみ会のますますのご発展と会員皆様のご健勝ご多幸を
ご祈念いたします。

会員皆様の近況

(頁14～23、卒年順に掲載、敬称略)

○助川文子 (昭和25年卒)

高齢の為、総会不参加とさせていただきます。
幹事の皆様ご苦勞様です。

○二平満男 (昭和25年卒)

四国の山野は鮮緑に覆われ、連日のコロナ禍ニュースに一抔の明るさを与えております。

故郷を出て70年余、老夫婦2人暮らしで、年相応の病院通い
を続けながら、故郷を偲び、登頂した山、公園等のビデオに写
真に想い出にふけつたり、小さな庭の菜園で野菜作りに汗を流
したり、植木・草花の手入れをして楽しんで過ごす此の頃です。
乱筆乱文に大変遅くなりましたが御容赦下さい。

○糠沢ジョセフJ (昭和25年卒)

お知らせありがとうございます。コロナになり東京には暫
く行っていないませんが、又、皆さまにお会い出来る日を楽しみに
しております。皆様お元気で。

○遠藤 修 (昭和26年卒)

コロナ禍が終息に向かいつつあるとは云え、役員の方々のご
苦勞を拝察いたします。

さて、私事ですが、元氣だけが自慢で山登りやテニス、卓球、

社交ダンスに没頭しておりましたが、この5月11日脳梗塞に見
舞われ15日間1日6本の点滴を余儀なくされました。幸い大事
に至らず、昨日(5月26日)無事退院いたしました。

今回の入院で、改めて年齢(89歳)の現実を突き付けられた
ような昨今です。くれぐれも皆様のご健勝をお祈り致します。

○菅野 明 (昭和26年卒)

一日一日を踏みしめ、噛みしめて過ごしています。

過去2年半の外出自粛で日々の暮らしが相当変わったので、
認知症への備えの一環として、夫婦で「物忘れ外来」の診察を
受けました。予想通り、夫婦2人で1人分の認知力とわかりま
した。やがて2人で、0.7、0.5、・・・と低下する様です。
でも元氣です。

○鈴木 衛 (昭和26年卒)

コロナ禍も減少傾向とは云え、いまだ外出や他との交流も儘
ならない世相の中、残り少ない人生の私は(91歳)は被害者意
識の様なものを感じて生きています。

85歳までの仕事人生後、エブリサンデーになって6年余一日
置きのスपोर्टジム通いで時間の浪費と健康維持を兼ねての昨
今です。

他に自分史を執筆中ですが、91年余に亘る自身を顧みて、当
時を思い出して楽しく過ごしております。

(東京まゆみ会では最高齢者)

○寺島忠雄 (昭和26年卒)

幹事様、ご苦勞様です。順調に年を重ねております。

○崎田 功（昭和27年卒）

私は、終戦の年次（1946年）春、県立安達中学校（旧制中学最後の学年生）入学し、昭和27年3月、6年間の一貫教育を受け卒業しました。

この6年間はGHQ行政下の学校制度改変期、新教科社会科の世界史や人文地理の教科書出版は無く、教科書「民主主義」がありました。なぜか、人文地理授業での「オデッサ」だけは耳底に残っていました。

今にして毎日、「オデーサ」の報道を目にします。長い間続いた東西冷戦時代を、そしてその雪解けをも目にしてきました。

第3次大戦突入を思わせる現国際情勢からは目を離せません。人権尊重の自覚を欠く人をリーダーとする国に未来はない、と思うこと頻りです。

○武藤長充（昭和27年卒）

幹事様ご苦労様です。

小生は旧姓安達中学に昭和22年4月に入学、新入生代表として入学式に宣誓して以来、計6年間をまゆみの学び舎で過ごしました。

この間、軟式庭球部の諸君が伊勢志摩の全国大会で優勝し二本松全町挙げて提灯行列で駅から学校まで迎えたことなど想い出がいっぱいです。

卒業後東北大学に進学しその後は三井BK勤務で各地を転々とし縁あってここ鎌倉に居を定めて昨年傘寿を迎えましたが、いつも「あれが阿武隈川」を高村光太郎の唄に歌われた古里の風景が思い出されます。

東京まゆみ会のご盛会を祈ります。

○安齋善雄（昭和28年卒）

未知の新たなコロナウイルスの醜い繁殖を、ロシアによる愚かなウクライナへの侵略によって狭い地球は今や北も南もてんやわんやです。

思うところ、総て人間の思い上がりによる自得の無さによるものと思われてなりません。

勝手に地下に穴を空けたり、競って余る程のとび道具を手にし、遊びたい人達で一杯です。

大統領といわれる人は地球上に只一人であって欲しいとしみじみ思う今日この頃です。

今、私は、お陰様で元気にしています。今のところ足も無く動けない・言葉も話せない、鉢物の植物達（200鉢）との付き合いに長時間要しています。私の一方的な片思いですが・・・。

○石井壽子（昭和28年卒）

まゆみ会の知らせうれしく拝見いたしました。

コロナの時代いつもお心にかけて御企画下さる御苦労ありがとうございました。御礼申し上げます。

私、1月背の圧迫骨折をいたし養生の日々でしたが、ようよう日常にかえり只今リハビリに励んでおります。

老いをしみじみ感じた日々でした。

どうか皆様もくれぐれも御身御大切に御健勝をお祈り申し上げます。

秋のまゆみ会開催を楽しみに、せめてもう一度お世話様になった皆様に御礼申し上げます。願っております。ごきげんよろしゅう。

○安齋美代（昭和30年卒）
前略、ご苦勞様です。皆様にお逢い出来る日を楽しみにしております。

○斎藤俊行（昭和30年卒）

今から20年ほど前の事である。私は京都南座の近く、ロシア風レストランキエフで、京都ハルピン会の集いに御招待を受け参加したところ1943年ごろ旧満鉄自慢の特急アジア号の設計した人々とか、旧満鉄の役員クラスの蒼々たる人が参加しておりました。

その後同業他社の集まりがあり、月1回の計事録を或る人に依頼したところ、よくまとめていただいた。

そこで、私は、福島で発行されている同窓会誌に当時の近況報告をしたところ、歪波の高調波について書いた処、その人が私の先輩だという事をうちあげられた。

彼は、私の一期後輩の水田剛君で32年卒の男であった。彼は、今はいないが、同期には田丸副校長の我息が同期である。

○菅野寛雄（昭和30年卒）

東京まゆみ会の役員の皆様、何時もお世話になって居ります。現在、老妻と二人の生活です。新型コロナが小康状態になりましたが、私のような高齢で基礎疾患を持つ身では、気軽に外出することもままならず、お医者さんと薬に頼る毎日です。どうぞ会員の皆様お身体を大切にお過ごし下さい。

○蓮見 隆（昭和30年卒）

お陰様で社交ダンスもコーラスの先生もレッスンを再開して

下さったので85歳を楽しんでおります。その他国土交通省関係のOB会関連したボランティア活動や、野口英世資料館の保存に関するもの、カンボジアの里子を支援する会等々のボランティアでの脳活、肺活、筋活をして免疫力をつけ楽しい人生をもう少し続けたいと思っております。

○宮田陽三（昭和30年卒）

最近、腰痛がひどく、今回の総会には参加する事が出来ません。（年齢も86歳と高齢も加え）皆様に宜しく。

○油井文子（昭和30年卒）

老齡故独りでの遠出は控えておりますので、まゆみ会を欠席させていただきます。

皆様のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。コロナ禍と世の中の争い事が一日も早く収まりますように。

○大島庸世（昭和32年卒）

東京まゆみ会には、大変お世話になっております。コロナ禍で総会も2年続きの取りやめ淋しい思いを致しました。

今年は、何とか皆様にお会いしたいものです。

さて、第5回Vega展を、神田木の葉画廊で開きます。これも1年前の5月に予約していたものが10月に延び、そしてようやく今回の実現となりました。和紙に水性絵具、バレン摺りの伝統技法を使いながら現代版画を目指しています。

仲間には、美大時代のワンダーフォーゲル部の友人たちが集まっております。（モダンアート協会会員 日本美術家連盟会員）

○石郷岡重臣（昭和32年卒）

残り少ない人生ですが天寿を全うするまで元気でありたいと、ボケ防止して趣味のカラオケ、社交ダンスを楽しんでいます。

○笹島宏祐（昭和32年卒）

この度は、東京まゆみ会のお知らせをいただきありがとうございます。ごさいます。

私も昭和32年に安達高校を卒業しましてから65年が経ち、現在83歳になりました。大学卒業後は、日本勧業銀行（後に第一勧銀、現在はみずほ）に就職し、転勤も数多くし、最後は宝くじ部門の支店長として沖縄に勤務し、65歳で退職いたしました。

年々体も頭もの働きも鈍くなり、老いをひしひしと感じる今日この頃です。

ご案内をいただいた東京まゆみ会にも出席し皆様にもお目にかかりたいのですが、今回は欠席させていただきます。今まで東京まゆみ会を盛り上げて頑張ってくられた方々に心からお礼を申し上げます。皆様のご健康とまゆみ会の更なるご発展を心からお祈り申し上げます。

○諏訪親太郎（昭和32年卒）

お世話になっております。

5月1日に脳梗塞で入院し、治療中でリハビリもする為に参加出来ません。宜しくお願いいたします。

○保坂弘子（昭和32年卒）

皆様、お元気ですか。

永い間のコロナ感染の生活の中、突然ロシアのウクライナ軍事侵攻、胸が痛みます。平和の願いを無にする様な非常な状況に、早期終結を願い祈る毎日です。

今、新舞踊、少しずつスタートおり生徒さんと共に、私達に何が出来るか、話し合いながら、前を向いて頑張ってます。

10月まゆみ会総会とのこと、お元気で。

○武藤國造（昭和32年卒）

コロナウイルス禍を顧みる

週一卓球又はラケットテニス会は忘年会等年に一曲指導を受けるのが恒例。

元日帰りの子等に挨拶の一番披露が詰まり三番を宣言歌い上げて笑いと拍手に。歌詞は昨10月「紀の川」の水管破損TV映響・忘却の曲に至り覚える契機に。装置あつて歌えた曲に枕草子風の気付きもあった。

県防犯セミナー受付検温が今の○さん。半年前新座婦警。福進協会ピンポン検温名簿管理。

この一年体育館老人センター（囲碁）、ふれあいの家、図書館は工夫と対策で休みなし。太極拳月2回の他活動県内変更程度でほとんど年の計画完遂です。おかげで健康維持しています。

○横島享子（昭和32年卒）

何時もご案内お纏め有難うございます。ここ数年一層老化が進みましたが、何とか老夫婦2人で平穩無事に暮らしております。遠出は一切なく、近くの公園の散歩、買物、医者通いなどをして過ごしております。

皆様の御多幸をお祈りしております。

○安齋 隆（昭和34年卒）

安達高卒業生としての誇りは校歌ですね。

「あだちのまゆみ古の歌に詠まれし」で始まります。

万葉集に出てくるまゆみは、古くは私の村で作る和紙の原料となった。

これが都へ行くと「陸奥の国の紙」として紫式部らに愛された。わが国文明のはしりにわが田舎も貢献したのです。

そして「健児きたえよ心と身、健児かためよ身と心」と締めます。

これは何と釈迦の「心身一如」から来ているのです。

故郷二本松市のロータリークラブ60周年記念の会で、この私の「誇り」から話を始めてしまいました。

○移川栄二（昭和34年卒）

役員の皆様お疲れ様です。

80歳で健康体操を辞め、車も年令を考えて自主返納をしました。その後はウォーキングとラジオ体操を続けており、体は至って健康です。皆様によりしくお伝えください。

○氏家盛通（昭和34年卒）

“コロナ”のせいか“歳”のせいか、分からないが、体力の衰えが気になる最近です。

70歳が過ぎころに“老人はキョウイクが必要だ”と言われたことがあります。その時は、何をいまさらと思ったものでしたが、これは老人には、今日行くところがある”ことが必要だということでした。

PCで市内の地図を印刷して、敬老バスと沢山の5円玉を持

って、市内の神社とお寺巡りをしました。

寒い冬も手袋もしないで歩き回っていたら、手の指が60年ぶりに“しもやけ”になってしまいました。

子供のころは、冬は当たり前のようになっていたが、大人はならないと勝手に思っていました。

○丹野朝二（昭和34年卒）

此の2月81歳の誕生日を迎え、孫達から祝って貰い、嬉しくもあり寂しさも感じる複雑な心境です。

まだまだ元気そこで発想の転換、今日から18才、来年は28才と、1年間凝縮した人生での88の米寿を迎えようと決意を新たにしながら、2度目の町内会長（410世帯）の推挙を受けました。

町内会も高齢化社会まっしぐら、コロナ禍においての町内も衰退の一途をたどる昨今、如何に活性化を図るかが課題と会長を受諾しました。

現在も19の役職を熟（こな）しておりますが、「丹野式健康法」で健康を維持し役職を全うして行きたい。

○山本紀夫（昭和34年卒）

在京に同期の12、13人が元気にくらしています。

幹事渡辺浩司さんのお蔭で「辰と巳の会」(ワイワイガヤガヤ)年2、3回新年会・ゴルフ等で集まっていたが、コロナで2年中止続きです。もっぱらラインで近況を知らせあつてる。

自動車免許は返納してない。二本松へは車で帰っていたが、コロナで中止続きです。この年(昭和34年)のヒット曲は、ペギー葉山の『南国土佐をあとにして』である。

○水野イク（昭和34年卒）

遠出は出来ませんが、元気でおります。（82才）
さい。

○長田信子（昭和35年卒）

花だよりがしきりで心が浮き立つ日々です。

まゆみ会開催されますお便りくださりとてもうれしく拝見いたしました。

人生100年時代楽しく過ごさせて下さる事、感謝いたしております。

健康に留意して皆様とお逢いできます事、お待ちしております。

○風間 章（昭和35年卒）

連絡が来るたび安達高校時代の事が想い出されます。春の御城山、部活の楽しさ、対外試合の想い出、帰らぬ青春の楽しさが今でも浮かびます。

楽しかりし青春いまだコロナが治まり又お会い出来るのを楽しみにしております。

○高橋直洋（昭和35年卒）

東京まゆみ会事務局の方々には大変お世話になっております。

80歳になり行動範囲が狭まっております。

会合も出不足となつて、懇親会も遠慮させていただいております。

当面まゆみ会退会とさせていただきます。

色々ご配慮有難うございました。

○最上 茂（昭和35年卒）

コロナの曼防も解除され、少しずつ元の様子に近づいてきているように見えますが、まだまだ以前のようには程遠いように思われます中で、私には特に変化はなく日課のウォーキングは従来通り、山登りも以前と同じ月に1〜2度近隣の低山に行っています。

山梨県の山に多く行くのは、真近に富士山を眺めるのが良くてです。それ以外の所からも富士山は見れますが、正面に雄大な姿を見るのは快感です。

10月15日を楽しみにしています。幹事の方々ご苦労様です。

○熊谷紀子（昭和37年卒）

東京まゆみ会の皆様コンニチワ。長引くコロナで皆様とお逢いできずとても残念に思います。ふる里二本松の桜見物も行かないのでさみしいです。

又、会の行事が開催できるようにになったら、ぜひ参加させていただきますのでよろしくお願いいたします。

○早川ミツ（昭和37年卒）

『最近驚いた事』です。

ツバメがカラスを追いやることです。カラスが電柱に止まり、生ごみを散らかして困っていました。近所のお宅に、以前からツバメの巣がありました。二年前から我が家にもツバメの巣ができました。

今、ツバメが産卵の時でしょうか、ツバメが数羽で威嚇し二羽で林まで追いやっています。

○山口弘二（昭和38年卒）

今年の筍が沢山とれました。私は竹林ボランティアとして長年農家の竹林の整備を月2回行い、春には筍を沢山とつています。

25年位前までは、大きな炭窯で竹炭を焼いていました。3月には靴底で筍の頭を見つけ、小さいうちに掘り出します。4月に入ると毎日曜日に一人20本位掘ります。猛宋竹なので太く大きいため家庭の鍋では無理なので、半分にしたドラム缶でその場でアク抜きし持ち帰ります。又来年もおいしい筍がとれるよう暑さ寒さに負けず活動します。

○中根珠子（昭和39年卒）

東京まゆみ会の皆様お元気ですか。コロナですっかりお会いできなくなりました。

私の絵画展は、国立新美術館が閉館しない限り開催できました。今年2月、一般社団法人秋耕会の46回展では「秋耕会グラプリ賞」に選ばれ最高位をとる事ができました。

今は、会の副会長として、又副理事長として頑張っております。来年は個展を予定しています。故郷でもできればと考えています。

皆様にお会いする日までお待ちしております。

追伸、さいたま市で在住していますので、何かお手伝いがありましたらご連絡ください。

○松本キエ子（昭和39年卒）

新緑の鮮やかな季節です。コロナに明けくれ3年。うんざりしていた所にロシア進攻のニュース。避難民の姿は、あの原発

時とダブリやるせない思いです。

当時、ふる里が汚された！ショックでした。ふる里は歳月を経るほどに愛おしく掛け替えのないものです。

“春うらら 軽き心のその奥に 褪める事なしフクシマの記憶”（毎年四月にはフクシマを詠み、令和4年の詠草）

世界はめまぐるしく変わりつつあり、平和を維持するのが難しい時でもあります。されど平和を願い、ウクライナの人々の平安を切に祈っています。

○鈴木幸雄（昭和40年卒）

コロナにて会の開催できず残念ですが、久しぶりの会の案内楽しみにしています。

元気に仕事していますが、開催日には参加いたしますのでよろしくお願い申し上げます。

○小池茂樹（旧姓 佐藤）（昭和41年卒）

「いつも青春」と思っていたのが「後期高齢者」になりました。不動産を維持管理しつつ自給自足を目指し季節ごとの自然の恵みを頂きながら毎日キャンプのような生活を送っています。退職後始めた日本再発見の旅。今年は、襟裳岬と日南海岸を自転車で走ってきました。

両親の墓参で福島に行ったついでに故郷のあちこちを回るのが恒例行事になっています。

○渡辺博彦（昭和41年卒）

コロナ禍で、毎日航空公園をウォーキングしています。

○高橋智章（昭和41年卒）

3月13日に3回目のワクチン接種を終えました。今回は副反応もほとんどなく一安心ですが、この先どうなるのか不明なことが多く、よくわからない。

先日、昨年の夏にも自家製のミックス紫蘇ジュースを届けてくれた知人から宅急便が届きました。今回は掘りたての筍でした。早速お礼の電話をするも、案の定留守番電話。メールに切り替わり、翌日返信メール。親戚が掘ってすぐに「連絡をくれたので、取りに行つてすぐ箱詰めして発送した」とのこと。ありがたい。泥付き筍は新鮮そのもので、これはもう実に旨い。おかげで、春の味覚を十分堪能させていただきました。届けてくれた知人に感謝、感謝です。

○高橋悦子（昭和41年卒）

新緑も花々もきれいに咲いて、良い季節となりました。

自然は四季折々の顔を見せますが、コロナウイルスになって2年目が過ぎ、相変わらず我慢の生活をしています。

足が弱ってしまうと思ひ、駒沢公園、三軒茶屋、孫の所まで歩いていくようにしています。

脳の活性化の為、買い物に行つて料理を作り意識的にうごいています。

コロナが終息するのを待つて、皆様にお逢いする日を楽しみにしています。皆様もお元気にお過ごしください。

○太刀野静子（昭和41年卒）

皆さんお元気ですか。

コロナになり約3年余、世の中少しづつ動いていますが、世界

目を向ければ信じられない事が起きています。平和な世の中に戻つてほしいですね。

私は、あまり進む事もなく、ちよつとの運動と畑で野菜を作っています。あまり後を振り向かず、「大丈夫、何とかなる」という思いで前を向いて生活していききたいものです。

容姿は変わりましたが、気持ちは変わらずお会いしたいですね。いつもお世話様です。

○本田清五郎（昭和44年卒）

東京まゆみ会の皆様、コロナ禍の中でご健勝のこととお喜び申し上げます。

私は、安達高校を卒業後上京しすでに半世紀を越えて、改めて時の速さを痛感しています。

私も皆様に負けじと、現在第3の職場で奮闘中です。当会報への寄稿文を依頼されましたが、

何分にも浅学菲才の身でありますので、頭を悩ませています。多分、稚拙な掲載文になると思いますが、容赦の程よろしく

お願いいたします。

○阿部伊勢吉（昭和45年卒）

今年の2月に古希を迎えて年月の経つ速さに驚かされる一方で、家族を養うために会社勤めを続けています。高年齢社員としてこれまで得た知恵や経験を活用して若い人たちの可能性を充分に引き出し、更に多くの責任を担えるよう助けています。充実した日々を送る秘訣として、①満足することを学ぶ。

②病気に対処する。③夫婦の絆を強める。④謙遜になること。

以上、70代を元気に乗り切つて行きたいと願つております。

○佐藤富美夫（昭和45年卒）

高校を卒業して52年。人生70年。お互いに縁あってこの世生まれてきた。そして縁あって、いろいろの人のつながり、を持つている。人と人とのつながりには、縁の力が動いている。松下幸之助の言葉である。もう少し人のつながりを大事にしてみたい。もう少しありがたく考えたい。お互いのつながりを、更に強めていきたい。

今年こそ皆様とお会いできる日を楽しみにしております。

○長南邦年（昭和45年卒）

ジム通いと読書の日々は変わららずです。ウクライナの惨状に心を痛め、ニュースやインターネット検索の時間が多くなりました。

拒否権により国連の本来の機能が果たせない今の常任理事国体制のあり方が問われていると思います。

今年度から会社のOB会長となりましたが、総会は2年連続延期としました。まゆみ会は10月開催され、皆様と久しぶりにお会いできること、平和であることを感謝し楽しみにしています。

○山岸富子（昭和45年卒）

前略、まゆみ会会報、いつも楽しみにしております。

やはり、ふるさとのことが気がかりです。近ごろの地震のニュースなども多くなり、これからのことが心配になっていますが、皆様との交わりも楽しみにしております。

少しずつ感染の予防も見直されていくようですが、お気を付けて過ごされますようお祈りいたします。

○渡辺弘次（昭和45年卒）

私達年代も古希を迎え、ほとんどの方が会社生活も終わったことと思います。

今後は、運動・栄養・社会参加を心がけて、残りの人生を皆様方と楽しく過ごすことができればと思っております。

幹事さん、ご苦勞様です。

○大内正造（昭和48年卒）

私は、山登りにて大自然の空気を吸って元気に走り回っております。特に、昨年は東北の山々を色々な時期に登りました。

7月には、秋田駒ヶ岳に登りチングルマの大群を見ることができました。ついでに、田沢湖・十和田湖をめぐり、乳頭温泉・新玉川温泉にて身体を温めました。

9月には、会津磐梯山・西吾妻山に登り、眼下には猪苗代湖・檜原湖を見ることができました。

10月には、秋の栗駒山に登り、美しい紅葉の絨毯を見ることができました。

○平子杉代（昭和49年卒）

新型コロナウイルス禍も3年目を迎え、今日では少々落ち着きを感じられるようになりました。しかしながら、マスク着用、手指の消毒は欠かすことができない日々が続いております。

とにかく、皆様お元気で『東京まゆみ会総会・懇親会』にてお会いできることを楽しみにしています。

健康に留意し、体力を維持して毎日を過ごすことができるよう頑張りますよう。

○渡辺幹夫（昭和49年卒）

いつもご連絡いただきありがとうございます。事務局の皆様
に感謝申し上げます。

コロナ禍の約半年前にリタイアいたしました。外出自粛で、
日々の食品買い出しが楽しみな毎日です。

コロナ収束まで頑張っていきたいと思えます。皆様ご自愛く
ださい。

○神田久幸（昭和50年卒）

長年勤務していた出版社を2017年に定年退職。その後は
業務委託で出版社で仕事を続けてきました。

今年になってからは、フリーランスライター兼編集者として
活動開始。マイペースでやっています。

3年前から健康のことを考えて、ヨガレッスンに通い出した
のですが、これがいい生活のリズムになっています。

○菅野孝三（昭和50年卒）

皆様お元気ですか。コロナで3年間マスク生活で大変であり
ましたが、徐々にマスク解除の緩和がされてきそうですね。

私は、町会や神社の役員として、当町会の行事等に参加して
います。町会も、高齢化によりなかなか防災訓練等ができない
状況であります。人々の安全・安心を守るため、これからも

町の「きずな」を大切にして頑張っていきたいと思っています。
ますます、東京まゆみ会が発展することを祈念いたします。

○百川教彦（昭和50年卒）

東京まゆみ会の皆様、お元気ですか。

私は、今年3月末で第2の職場を任期満了で卒業しました。
卒業後、4月、5月と、はじめての長い休みを有意義にと思っ
たのですが、この生活にもあきてしまい、ただいま就職活動中
といった近況です。

○山田由美子（旧姓 塚原）（昭和51年卒）

卒業して46年・・・

学生時代は、ソフトボール、陸上。3人の子供達と一緒に3
年間剣道に励み、その後30年近くママさんバレーを続けてきま
した。本来なら、もうベンチからの応援の身なのですが、この
コロナ禍で参加人数が少なく、週二日の練習日には重たくなる
体重を、思いつきりアタックに込めています。

来年の母校創立百周年に向けて、微力ながらお役に立てまし
たら幸いです。今年、東京まゆみ会で皆様にお会いできる事
を心から楽しみにしています。

○伊藤公志（平成2年卒）

都内公立小学校副校長として勤務中。教育のDXが急速に進む
中、教育改革に日々取り組んでいます。また、人材不足や働き
方改革といった問題を抱え苦労は絶えませんが、まゆみ魂で頑
張っています。

○渡辺達夫（特別会員）

特別会員ですが、兄は「役員会」の仕事が多忙の様で、「総会」
には欠席しがちですが、今後は遠路そろって参加するようにし
ます。兄弟ともに、英会話等の各種学校にはよく通い、趣味・
教養をひろげます。会報や集会の案内等を双方に送付ください。

令和3年度年会費納入者ご氏名 その1

令和4年7月20日現在

(※印は年会費に加えてご寄付を頂いた方。)

(卒年) (敬称略)

昭 25	高橋 功	二平 満男	松井 重喜
昭 26	湊 幸三		
昭 27	安斎 貞夫	菅野 明	作田 文弥
	鈴木 衛	星 秀男	森 勝夫
	安斎 正敏※	栗原 絹子※	小林 久
	崎田 功※	篠沢 清定	高野 敏夫
昭 28	武藤 長允		
	石井 壽子	大澤堂弘三	菅野 睦子
昭 29	中田 綾子		
	撞井ヨウ子	諸根 靖忠	
昭 30	安斎 美代	菅野 善作	菅野 寛雄
	菅野 博	鈴木 史朗	蓮見 隆
	本田 茂	宮田 陽三	
昭 32	大河内健次	大島 庸世	小林 哲子
	紺野 英男	佐藤 邦英	鈴木 徹郎
	諏訪親太郎	保坂 弘子	前田 長
	武藤 國造	横島 享子	吉川 フミ
昭 33	岡 安男	菅野 軍司	武藤 昌子
	渡辺 昭雄		

(卒年) (敬称略)

昭 34	安斎 隆	安斎 宏	安藤 勇夫※
	伊藤 定男	氏家 盛通	移川 栄二
	狩野 博	熊田 聰男	澤井 信明
	田中 清勝	丹野 朝二	藤田 孝男
	三浦 英夫	三浦 利榮	水野 イク
	山本 紀夫	渡邊 浩司	
昭 35	長田 伸子	風間 章	神野 宗介
	最上 茂	渡辺 紀雄	
昭 36	坂本 盈子		
	遠藤 昭平	熊谷 絢子	熊谷 紀子
昭 37	佐久間 哲	早川 ミツ	古谷 修一
	遊佐 莞次	渡辺 峻志	
昭 38	遠藤 禎一	鳴原 秀夫	佐藤 利春
	山口 弘二		
昭 39	中根 珪子	山崎 民子	
	安藤 公夫	斎藤 克彦	桜井 園子
	鈴木 幸雄	本間 幸次	渡辺 健司
昭 40	小池 茂樹	齋藤 和夫	高橋 悦子
	高橋 智章	太刀野 静子	築山くに子
昭 41	渡辺 二郎	渡辺 博彦	
	荒巻 太多光	鈴木 陽子	常住美智子
昭 42	中島 久	吉田 茂	
昭 44	国分 正敏	本田 清五郎	

令和3年度年会費納入者ご氏名 その2

令和4年7月20日現在

(※印は年会費に加えてご寄付を頂いた方。)

(卒年) (敬称略)

昭45	阿部伊勢吉	飯田博幸	大野恵美子
	加藤正博※	小牧林	佐藤富美夫
	菅原広司	長南邦年	塚原保子
昭47	荒井守仁	渡辺弘次	
昭48	大内正造	橋本哲雄	
昭49	野地章	平子杉代	松川艶子
	渡辺圭二		
昭50	阿部孝志	菅野孝三	鷹木伸一
	百川教彦		
昭51	朝比奈恵子	岩本薫	菅野育夫
	佐藤満	本田昭則	増子俊満
	山崎力	山田由美子	
昭54	田村昭彦		
昭59	佐藤一広		
昭60	宍戸岩		
特別	渡辺達夫		

(以上 140名)

安達高校創立100周年記念事業の進捗状況について

皆様ご承知の通り、母校福島県立安達高校は、令和5年4月16日に創立100周年を迎えます。つきましては、現在の主な記念事業の進捗状況を、以下にお伝え致します。

① メモリアル募金活動

安達高校同窓会、安達高校、安達高校PTAの3者による「創立100周年記念事業実行委員会」を設立し、「100周年記念事業メモリアル基金」の創設と「100周年記念誌」の発行などに向けて、1500万円を目標に募金活動を展開中です。

「メモリアル基金」の用途は、現在次の項目について安達高校同窓会と安達高校とで検討を進めています。

- ユネスコスクール海外派遣者への助成
- 芸術鑑賞教室・部活動への助成
- 国家資格取得、英検・数検・漢検検定料の助成
- 卒業生の資格取得等、再チャレンジへの助成

② 記念式典の開催

・〔開催月日〕 令和5年10月28日(土)

・〔記念講演〕 日本看護協会長福井トシ子氏(昭51年卒)を予定。祝賀会出席者、アトラクション等は現在検討中。

③ 記念誌の発行

・現在、安達高校内にある資料をもとに構成の骨組みを検討中。古い資料や写真などがございましたらご提供ください、
へ以上、令和4年7月末現在の安達高校同窓会情報による。へ

東京まゆみ会会則

- 第1条 本会は、「東京まゆみ会」と称し、事務所を首都圏に置く。
- 第2条 本会の会員は東京を中心に広く在住する福島県立安達中学(旧制)、同安達高校(併設中学、本校および旭・針道・小浜・岩代・渋川・石井・大平の各分校定時課程、夜間過程を含む)ならびに二本松実科高女、福島県立二本松高女、同安達女子高校の卒業生、同関係者で組織する。
- 第3条 本会は会員相互の親睦と共栄を図り、併せて母校の隆盛発展に寄与することを目的とし、そのために必要な諸般の事業を行う。
- 第4条 本会は次の役員を置く。任期は2年とし、再任を妨げない。
- 第5条 会長1名、副会長若干名、事務局長1名、会計1名、常任幹事10名以内、会計監査1名、幹事20名以内。会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。事務局長は会の運営を円滑にするため、事務上における全般を遂行する。会計は本会の金銭出納、会計管理をする。常任幹事は会務を分掌、幹事とともに会の運営に当たる。会計監査は会計を監査する。
- 第6条 会長、副会長、事務局長、会計、会計監査、常任幹事(以上を常任役員と称する)は、総会において選任し、幹事は、常任役員会で選考のうえ会長が委嘱する。なお、補欠として選任された役員は、前任者の残任期間とする。
- 第7条 幹事会が必要と認めた場合、諮問機関として顧問を置くことができる。
- 第8条 総会は年1回、臨時総会は必要に応じ会長が招集する。総会では常任役員(※幹事以外)の選任、会則の変更、会計の承認、会計監査の報告、その他重要事項を決議する。
- 第9条 総会の議事は、出席会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決するところとする。
- 第10条 幹事会および常任役員会は、必要に応じて会長が招集し、総会に次ぐ重要事項や緊急事項を協議する。
- 第11条 本会の経費は、会費、寄付金などをもって充てる。会費は年額2,000円とする。
- 第12条 本会の会計年度は8月1日に始まり、翌年の7月31日に終わる。
- 第13条 本会の事務執行に関する細則は、幹事会で決定することができる。
- (付則) この会則は、昭和48年4月1日より施行する。
- (二部改正)
- 平成8年9月15日
平成13年9月9日
平成16年8月3日
平成22年8月29日
平成27年8月30日
平成30年10月13日

現在の役員体制

令和4年7月20日現在（卒年順）

【顧問】	安斎 隆（昭34）	安藤 勇夫（昭34）
【会長】	高橋 智章（昭41）	
【副会長】	阿部伊勢吉（昭45）	佐藤富美夫（昭45）
	平子 杉代（昭49）	
【事務局長】（兼）	佐藤富美夫（昭45）	
【会計】	大内 正造（昭48）	
【会計監査】	渡辺 弘次（昭45）	
【常任幹事】	早川 ミツ（昭37）	百川 教彦（昭50）
	山田由美子（昭51）	
【幹事】	小池 茂樹（昭41）	常住美智子（昭42）
	菅野 孝三（昭50）	菅野 育夫（昭51）
	宍戸 岩（昭60）	
		以上

会からのお願い

☆新会員ご紹介のお願い☆

本会は、入会の申し込みを常時受け付けております。

同期・先輩・後輩の方に入会を希望される方がいらつしやい
ましたら、本会事務所宛て、もしくは、当会役員に、氏名、卒
業年度、住所、電話番号をお知らせ頂きたく、宜しくお願い致
します。

なお、新会員の方は入会年度の年会費免除とさせていただきます。

編集後記

相変わらずコロナ感染は終息せず、国内外で次から次へと発
生する自然災害や事件・事故、更にロシアによるウクライナ軍
事侵攻など不安にさせられるニュース報道に心が痛む毎日です。
さて、今年も会員皆様からの「近況報告」を掲載することに
し、60名近くの方々からお便りを頂戴致しました。リモートな
がら、同窓仲間間の情報交換の一助になれば幸いです。

高校を卒業してから〇〇年。「ふるさと福島」を思い出しながら、
自分の生きてきた歩みを見つめ、これからの人生を考えた
方も多かったのではないでしょうか。

会員皆様方のお便りを読み、さすが安達高校は、来年創立1
00周年を迎える歴史ある伝統校だと実感。巣立った卒業生
達は、都会の様々な分野で高い志をもって活躍されてきたこと
が伝わってきます。今度は、ぜひとも直接会って対面で話を聞
いてみたい：青春時代を思い出しながら。

今年度の総会は残念ながら中止となりましたが、来年こそは、
会員皆様と一堂に会して、母校創立100周年を共に祝いたい
と願っております。

《会報編集委員会》

平子 杉代 大内 正造
安藤 勇夫 小池 茂樹

東京まゆみ会会報 第34号

発行人 東京まゆみ会 会長 高橋 智章

〒272-0033

千葉県市川市市川南3-14-11 A313

電話・FAX 047-324-7361

印刷所 モリモト印刷株式会社

〒162-0813

東京都新宿区東五軒町3-19

電話 03-3268-6301(代)